

2024年度NGO海外援助活動助成・多文化共生推進活動助成

# 完了報告レポート



一般財団法人ゆうちょ財団  
国際ボランティア支援事業部

【表紙の写真】  
通学日に昼食の弁当の提供を受けた奨学生。  
(DAREDEMO HERO；P12～P13)

## はじめに

平素より、ゆうちょ財団の助成事業にご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

国内では外国人の受け入れの必要性が高まる中で、文化的背景を異にする人々が共生する社会を構築することが求められていることから、2024年度は従来のNGO海外援助活動助成に加え、多文化共生推進活動助成を開始しました。これにより、多文化共生推進活動助成の2団体とNGO海外援助活動助成の10団体が日本国内を含む9か国で活動を行いました。

このたび、各団体からご提出いただいた報告書をもとに、活動状況や参加した人々の声をまとめましたので、ご報告いたします。

各団体の熱心な活動に対し、心より敬意を表しますとともに、今後のさらなるご活躍をお祈り申し上げます。引き続き、皆様の深いご理解と温かいご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

2025年9月

一般財団法人ゆうちょ財団  
理事長 小笠原 倫明

# 目 次

## 1 2024年度NGO海外援助活動助成

|                               |    |
|-------------------------------|----|
| A S H A                       | 4  |
| イランの障害者を支援するミントの会             | 6  |
| 国際NGO ViVID                   | 8  |
| Support for Woman's Happiness | 10 |
| DAREDEMO HERO                 | 12 |
| 地球の友と歩む会                      | 14 |
| ブルードット                        | 16 |
| You & Meファミリー                 | 18 |
| Little Bees International     | 20 |
| LOOB JAPAN                    | 22 |

## 2 2024年度多文化共生推進活動助成

|                  |    |
|------------------|----|
| 国際交流の会とよなか(TIFA) | 26 |
| モザンビークのいのちをつなぐ会  | 28 |

# 1. NGO海外援助活動助成

2024年度の助成団体10団体について、活動概要、助成期間中の活動に関するReport及び参加した人々の声をまとめました。



特定非営利活動法人 ASHA

## 地方医療における医療情報管理を通じた 医療の質向上支援

**ネパール** 第5州Dang郡Gadhawa村 (2024年4月～2025年5月)  
助成額:943,943円

### ■ 活動の概要

ネパールのGadhawa村では、有床病院が存在せず、診療所（ヘルスポスト）、簡易診療所、スネークセンターが医療の主な担い手です。交通インフラの未整備により都市部の病院へのアクセスが困難であるため、地域内で提供される医療の質の向上が重要な課題となっています。

しかしながら、これらの医療機関ではカルテの管理が行われておらず、患者の診療情報が蓄積されていない状況にあります。手書きのカルテは患者に渡されますが、再診時に持参する割合はわずか10～20%です。こうした状況では治療が場当たり的になりがちで、薬剤の重複投与などのリスクも指摘されています。また、医療機関側にも簡便な台帳しかないため、患者さんの情報が蓄積されません。結果として、自治体も地域の医療状況を正確に把握できず、医療資源の補充や予防施策も十分に実施できない状況です。

ASHAは、このような状況を改善するため、これまで隣のRajpur村で実施してきた電子カルテシステム NepalEHRの導入実績を踏まえ、Gadhawa村でも同様の医療情報管理体制を構築する活動を行っています。まずは現地調査を行い、導入範囲や必要なカスタマイズを検討したのち、ソフトウェアの調整、医療機関でのトライアル導入、本格的な運用へと段階的に進めていきます。

さらに、自治体職員や医療従事者に対して、蓄積された医療データの活用方法を共有し、データに基づく施策立案が可能となるよう支援を行います。今回の取り組みでは、従来属人的であった導入方法を見直し、他地域でも再現可能な導入手順のパターン化・効率化を図ってまいります。

ASHAは本活動を通じて、Gadhawa村のみならず周辺地域全体の医療の質とアクセスの向上を目指しています。



(写真1) Gadhawaのヘルスポスト（HP）スタッフに対してNepalEHRの導入の意義を説明



(写真2) 隣村Rajpur村のヘルスポスト（HP）におけるNepalEHRの使用状況をヒアリング

## ■ Report

2024年度において、ASHAはネパールGadhawa村で医療現場における情報管理システム「NepalEHR」の導入を進めました。まず、現地プロジェクトマネージャー（PM）と作業計画を策定し、日本人スタッフが現地を訪問しました。そして、対象のヘルスポスト（HP）の業務を調査し、必要な機能を洗い出しました。また、自治体との合意形成も行い、開発と導入に向けて準備を進めました。

開発面では、患者検索業務の効率化を目的に、現地で発行するHealthConnectIDをNepalEHRに登録する仕組みを導入しました。これにより同姓同名が多い地域でも、IDを使って患者を特定できるようになり、診療業務の大幅な効率化が実現しました。また、プログラムファイル管理にGitHub（ソフトウェアバージョン管理サービス）を活用することで、複数のHPでの導入時に起こりうる作業ミスを防止しました。

さらに、現地のHPに耐久性の高いパソコンや周辺機器を設置し、砂埃や高温など厳しい環境でも安定稼働を目指しました。導入時にはセレモニーを行い(写真3)、現地スタッフ向けのマニュアルやオリエンテーションも実施。HP職員がスムーズに操作を習得できるよう支援しました。

加えて、隣のRajpur村で収集した1万件以上の診療情報を分析し、年齢・性別ごとの受診傾向を把握するなど、データを活用した保健計画の基盤づくりも進めました。

一方で、開発開始前に現地側と整理した要件だけでは足りず、導入後のオリエンテーションで追加要望が出たため、一時中断を余儀なくされました。この反省を活かし、今後は開発の途中段階から現地に画面イメージを共有し、早期に細かな要望を把握して調整することが課題です。こうした取り組みを通じ、現地医療現場の業務効率化と住民サービスの向上を目指していきます。



(写真3) ヘルスポスト（HP）での  
NepalEHRの導入セレモニー

## ■ 参加した人々の声

- ・ NepalEHRがHPに導入されることによって、HPを訪れた住民の医療データが適切に管理されることを期待している。また、医療データが蓄積されていけば、それらを地域の公衆衛生に活かせるようにしたい。（現地自治体の保健担当者）

**特定非営利活動法人 ASHA**

住所：〒105-0013東京都港区浜松町2丁目2番15号 浜松町ダイヤビル2F

URL：<https://www.asha-np.org/>

特定非営利活動法人 イランの障害者を支援するミントの会

## 車いす障害者の印刷技能を活用した社会参加事業

イラン アルボルズ州キャラジ市 (2024年4月～2025年3月)

助成額:1,000,000円

## ■ 活動の概要

イランの車いす障害者(脊髄・頸髄損傷者)は、入院期間が1か月程度と短いためリハビリや障害に関する知識を得る機会が少なく、自宅で寝たきり生活や外出困難となるケースが多くいます。そのため、障害の特性に合った技能訓練を受ける機会がなく、就労や社会参加の機会は限られています。障害の原因は交通事故が多く、働き盛りの障害者が多いので生計維持が困難となり、障害者自身や家族が生活に困窮することが多くなります。また、医療費の自己負担は7割で負担が大きいため医療やリハビリを受けて自立した社会生活を送ることは困難な状況です。

こうした状況に対して、イランの障害者を支援するミントの会は2022年から現地にNGOミントリハビリセンターを運営し、障害者に対して社会参加の場の提供、経済的自立のための技能の習得、地域社会に対する啓蒙活動に取り組んでいます。具体的には、車いす障害者(脊髄・頸髄損傷者)がパソコン印刷技術を学ぶ研修を行い、イランで普及していないパンフレット・名刺を車いす障害者が自ら作り、行政や地域に配布し、ミントリハビリセンターをアピールする活動を行っています。



(写真1) オリジナルカレンダーの作成



(写真2) ミントリハビリセンターの屋外テラスに掲示されたポスター

## ■ Report

イランでの活動拠点であるミントリハビリセンターでは、障害のある人々を中心としたさまざまな研修や交流活動を実施しています。2024年度は、地域の障害者を対象にした研修会やイベントを計9回開催し、延べ356名が参加しました。研修では、パソコンを使ったポスターやチラシの作成、アロマや手洗いの体験会、ポッチャ大会や料理・音楽を通じた交流会など、参加者の興味や特技を生かした多彩な内容が展開されました。活動の中で、メンバーが自ら企画・準備・運営を担い、積極的に関わっている点が大きな特徴です。

特に印象的なのは、パソコンや手描きによるポスターやカレンダーの作成活動です。これらの作品は地域で配布され、ミントリハビリセンターの活動を地域に広めるツールとして活用されました。また、ミントリハビリセンターの会報も第1号・第2号を発行し、福祉機関や施設などに配布することで、より多くの人々に情報を届けることができました。研修の成果として、メンバー70名分のメンバーカードや個人ファイルが作成され、センター利用時に活用されています。これにより、障害を持つ方々自身が自らの情報を管理し、活動に自信をもって参加する環境が整いました。



日本国内でも積極的に活動報告を行っており、神奈川県秦野市や横浜市をはじめ、大学やJICA交流会など、10を超えるイベントで活動を紹介しました。中でも、神田外国語大学での講義では学生の心に響き、「自分も誰かの支えになりたい」といった前向きな感想が寄せられました。また、多文化交流イベントでは、日本とイランの障害者が共同でものづくり体験を行い、国境を越えた理解と連携の場となりました。活動を通じて得られた成果は、参加者の創造性と協力の中で生まれたものであり、障害者が社会とつながりながら主体的に生きる姿勢を支えるものとなっています。

一方で、習得したパソコン技術を収入につなげる仕組み作りについては課題が残り、今後は商品の販売など持続可能な活動につなげる工夫が求められています。ミントリハビリセンターの取り組みは、障害者が自らの力で学び、発信し、社会と関わるための大きな一歩となっています。これからも地域や国内外とのつながりを深めながら、さらなる発展が期待されます。



(写真3) 障害者メンバーの家族や近隣の市民も参加したボッチャ大会



(写真4) 会報づくりやポスター・チラシづくりなどに参加していただいた方々とミントの会スタッフ

## ■ 参加した人々の声

- ・ミントセンターの登録カードをみんなで作ってよかった。デザインや作る目的を考える過程で色・名前・IDナンバーを入れることになった。カードは写真が入っていて、センターへの連絡や名刺のように使えるのがよかった。
- ・重度の障害者もカレンダーに絵を描くことに参加してくれた。みんなで作って好きな絵が書けたのが素晴らしい。カレンダーの紙を自宅にもって帰り夢中になって絵を描いた。イランではカレンダーはあまり見かけないけれどいつでも見て利用できる。
- ・ポスターにミントセンターの活動が全部掲載されているので、どのようなリハビリ機器があるか？ボッチャをやっていることなどわかりやすく多くの人に知ってもらえた。ポスターを見た人から「今度は誘ってください」と言われた。
- ・しおりやお正月のカードを作るときに折り紙やマスキングテープを貼り合わせラミネーターできれいにできた。ラミネーターを使うのは初めてだった、楽しくなるようなデザインでミントセンターの中に飾って見たらセンターの雰囲気が明るくなった。
- ・いつも家族と一緒にセンターに来ていたけれど、作る作業を始めると夢中になってしまった。作ったものを家に持って帰るのが楽しみです。



(写真5) アルボルズ州福祉省から授与された感謝状とパシャイ代表

**特定非営利活動法人 イランの障害者を支援するミントの会**

住所：〒257-0003 神奈川県秦野市南矢名2035-4 グレイス秦野101

URL：<https://www.mint-assist.com>

国際NGO VIVID

## 「村おこし」2024 ～農業事業～

**ガーナ** アシヤンティ州セイチェレクマウ地区セイチェレ村(2023年4月～2024年3月)  
助成額:739,000円

## ■ 活動の概要

国際NGO VIVIDは、ガーナ共和国アシヤンティ州のセイチェレ村において、貧困問題とその連鎖を断ち切るための地域コミュニティ開発事業に取り組んでいます。セイチェレ村は人口5,000人ほどの小規模な農村で、住民の多くは自給自足の農業に従事していますが、その半数以上が土地を所有しておらず、貧困の悪循環に苦しんでいます。特にコロナ禍以降、雇用の減少や食糧不足といった深刻な課題が浮き彫りとなり、VIVIDは農業を基軸とした「村おこし事業」を開始しました。

事業の中核には、農業技術の習得を目的としたセミナーの開催があります。村の農民が希望する作物や技術に関する調査をもとに、トマトやカカオの栽培法、土壌保全、肥料の使い方など、多様なトピックをカバーする講習会を企画しました。また、有志農民をセミナーリーダーとして育成し(写真3)、段階的に知識を広めていく仕組みを導入しています。これまでガーナ政府の農業普及サービスと連携し、座学や実地訓練、模擬講習を通じてリーダー育成を行いました。最終的にはリーダーたちが村全体へ技術を伝える体制を構築し、持続可能な農業による収入向上を目指しています。

VIVIDは、農業を起点に教育やジェンダー問題へもアプローチし、セイチェレ村の貧困の連鎖を断ち切る多角的支援を今後も継続して行きます。



(写真1、2) 住民説明会の様子



(写真3) セミナーリーダーの皆さん



## ■ Report

ViVIDは2024年度、ガーナ・セイチェレ村において、農業を通じた地域支援活動を精力的に展開しました。

まず事業の開始にあたり、住民説明会を開催(写真1,2)し、これまでの実績や本年度の事業計画を共有しました。説明会では住民との意見交換や、今後実施予定の農業講習会に向けたニーズ調査も行い、参加者の関心が高いテーマの把握に努めました。

講習会の前段階として、ViVIDが養成したセミナーリーダー(写真3)に対する知識補充セミナーを計10回実施しました。これらのセミナーでは、農業普及員や地方農業局、小農民協会、現地NGOのAgricconnectから講師を招き、専門的な知見を提供しました。苗づくり、施肥、土壌保全、灌漑システムなど、多岐にわたるテーマが扱われ、セミナーリーダーたちは模擬セミナーを通じて指導力の向上に努めました。また、地域農家全体を対象とする講習会も実施され(写真4)、全10回で延べ439名が参加しました。

参加者への5段階評価のアンケートでは、講習内容の有用性(平均4.09点)やセミナーリーダーの説明力(平均3.96点)について高評価が寄せられました。さらに、「次回もこのテーマを深く学びたい」との回答も多く(平均4.19点)、住民の学習意欲の高さがうかがえました。

一方、地域農家がいつでも農業知識や技術にアクセスできる拠点として機能し、セミナーリーダーによる支援や農業資材の販売、農産物の流通などを通じて、持続可能な農業の実現を目指す地域拠点とするべく準備してきたViVID Associationについては、運営開始には至らず、今後の課題として残りました。しかし、運営方法に関する議論は進み、セミナーリーダー主体での自立的な活動基盤づくりが前進しています。今後は、地域住民への周知とともに、誰もが農業知識にアクセスできる拠点としてのAssociationの整備が期待されます。セミナーリーダーの自信と専門性の向上も確認され、今後の活動のさらなる発展が見込まれます。



(写真4) 住民向け農業講習セミナー

## ■ 参加した人々の声

- ・この講習会では、これまで知らなかった農業の技術や知識をたくさん学ぶことができました。限られた資源の中でも利益を上げられる方法を知ることができ、自信ができました。学んだことをすぐにでも実践して、収入を増やしたいです。何より、同じ悩みを持つ仲間たちと学び合えたのが嬉しかったです。
- ・今回の講習会では、自分の農業経営を見直す大きなきっかけになりました。新しい農法や収穫後の保存技術について学んだことで、これまでより効率的に作物を育てられると実感しています。また、こうした知識を地域の若者たちにも伝えていくことで、村全体の発展にもつながると思います。

### 国際NGO ViVID

住所: 〒231-0063神奈川県横浜市中区花咲町1-31-806

URL: <https://vividvillagejpn.wixsite.com/japan>

特定非営利活動法人 Support for Woman's Happiness

## 少数民族と障がい女性を支える製品づくり：被服

ラオス ビエンチャン(2024年4月～2024年12月)

助成額:961,505円

## ■ 活動の概要

Support for Woman's Happiness(以下、「SWH」)は長年にわたりラオスで教育支援を行ってきた中で、障がい児が教育を受けられない現実と直面しました。多くの子どもたちは学校に通うことができず、家族以外と関わる機会もほとんどない生活を強いられています。さらに、ラオス国内には障がい者施設の数少なく、必要としている人が入所できない状況が続いています。こうした環境の中、当事者から「自立したい」という強い声が上がりました。そこで、SWHは障がい者のための作業所を開設し、暮らしながら職業訓練を受けられる環境を整えました。これにより、親元を離れて自立した生活が可能になり、ものづくりを通じて得た収入を自身の意思で活用できるようになりました。これまでになかった自尊心が芽生え、自己決定の機会が増えたことは大きな成果です。

しかし、ラオスにはまだ福祉制度が整備されておらず、今後の発展が求められています。特に、障がい当事者が社会の中で発言権を持つために、リーダーの育成が急務とされています。また、作業所が自立し、ブランド運営を行うためには、製品の種類を増やし、品質を向上させ、新たなデザインを生み出す力が必要です。多様な製品を作る訓練を行うことで、それぞれの得意分野を伸ばし、個々のスキルを向上させることが期待されています。

2017年からは雑貨や靴などの製品づくりに力を入れてきました。2024年度は、手織りの生地を使ったワンピースの開発を進めています。パターン制作は日本の専門家に依頼し、3つのデザインが完成しています。また、手つむぎのコットン生地を使用した試作品を首都ビエンチャンのテイラーに依頼し、完成形を確認しました。しかし、障がい作業所では手つむぎコットンの扱いが難しいため、まずは紡績糸を使用した手織りコットンのワンピース作りから始めました。このプロジェクトの一環として、上記のテイラーの女性に講師となってもらい、作業所のメンバーに技術指導を行いました。ラオス国内で技術習得から指導まで完結できる仕組みを作ることで、持続可能な運営を目指しています。完成した製品は国内のイベントに出展し、フィードバックを得ながら改良を重ねていきます。将来的には、作業所だけでカラーやサイズ展開を行えるよう、技術の向上と自立支援を進めていく方針です。



(写真1) 研修の打合せ(左端は団体石原理事))



(写真2) 障がい作業所メンバーと制作した型紙



## ■ Report

日本の専門家に依頼して制作された3つのワンピースのパターンを基に、ラオスの障がい作業所で4回の研修が行われました。初回は型紙の写し方や基本を学び、3回目には製品レベルの仕上げ、4回目には製品用生地での制作が行われました。身体的な制約を持つメンバーへの配慮も行われ、安心して研修に取り組むことができました。

これまで外部指導の機会が少なかったため、実施前は不安もありましたが、ラオス人講師が熱心に指導し、障がい作業所のメンバーも安心して40日間の研修を継続できました。作業所のメンバーは時間通りに通学し、授業を受けて帰宅する流れが問題なく実施されたことから、今後も定期的なレッスンを継続したいと考えています。

基本的な姿勢として、日本側は見守る体制を取り、ラオス人の自主性を重視しました。結果として、彼らが主体的に製品を完成させ、フィードバックを受けることができるようになりました。そして、ラオス国内のみならず、日本市場への出品が可能なレベルの製品が完成し、大きな自信につながりました。丁寧な仕上げや細やかな修正技術は、外部の専門講師からの指導によって向上しました。また、試着を通じて着心地や布の特性を確認し、消費者を意識したものづくりの視点も養われました。単なる製造だけでなく、ブランディングや市場調査の基本を学ぶ機会となりました。

障がいのあるメンバーにとって、ミシン作業における身体的な課題が浮き彫りになりました。基本的なものづくりには問題がないものの、より高度な製品を作る際には、障がいの特性を考慮した分業の検討が必要です。作業の効率と個々の成長を両立する方法を模索することが今後の課題です。



(写真3) 作業中の障がい作業所メンバー



(写真4) 仕上がったワンピース

## ■ 参加した人々の声

(研修に参加した障がい作業所のメンバー)

- ・自分だけでは作ることができないデザインにチャレンジできて楽しかった。
- ・日本で人気のデザインを知ることができた。
- ・外部施設に通うのは大変だったが、授業を受けるという切り替えができて集中できた。
- ・先生が優しく、安心して受講できた。
- ・他の色でも制作してみたい。左右で柄がちがうものもチャレンジしてみたい。

特定非営利活動法人 Support for Woman' s Happiness

住所: 千120-0034 東京都足立区千住1丁目34の4の3号室

URL : <https://www.support-women.net/>

NPO法人 DAREDEMO HERO

# 貧困層からのリーダー育成事業

フィリピン セブ州セブ市 (2024年4月～2025年3月)

助成額: 1,000,000円

## ■ 活動の概要

フィリピンには深刻な貧富の差があり、貧困層は努力しても成功が難しい社会構造が存在しています。この問題の根底には、貧困層が教育を受けられない現状があります。この問題の解決のためには、貧困の経験者が声を上げ、リーダーシップを発揮することが重要です。しかし、貧困層には教育機会が乏しく、大学進学への支援も難しいのが現実です。DAREDEMO HEROは、未来のリーダーを貧困層から育成し、国の貧困問題の根本解決を目指しています。単に「貧困だから」「かわいそうだから」と支援するのではなく、やる気と志のある子どもたちを選び、徹底した教育支援を行っています。彼らが将来、他の子どもたちに平等な教育機会を提供できる人材、貧困問題を解決できる人材になるよう育成しています。現在、団体は小学3年生から大学2年生までの57名の奨学生を支援しています。

また、週末の特別授業では、日本語、英語、数学の資格を持つ教員を採用し、レベルの高い学習環境で対面授業を行っています(写真1、2)。さらに2022年からは、奨学生の保護者に対して金銭管理・栄養指導・救護活動セミナーなども行い、より包括的な支援を提供しています。



(写真1) 有資格教師による週末授業



(写真2) 団体インターンによる日本語授業



(写真3) 日本人訪問者との交流



## ■ Report

DAREDEMO HEROはフィリピンのセブ市で2024年度も継続して教育支援活動を行いました。支援対象は60名の奨学生で、3名が大学を卒業し、活動終了時の奨学生数は57名となりました。

毎週土曜日に有資格教員による英語・数学の指導、そして日本人インターンによる日本語授業などの特別授業等の学習支援(写真1)のほか、高校生以上の奨学生の進路支援にも力を入れ、定期面談を実施しています。その成果として、DAREDEMO HEROでは初となる3名の大学卒業生が誕生し、それぞれアクセンチュア社、アメリカの有名企業、日本の学校(外国語指導助手)への就職を果たしました。

また、夏季特別授業やファミリーデー、クリスマス会(写真4)を通じて、DAREDEMO HEROが運営するラーニングセンターの子どもたちとの交流の機会も設けられました。特にリーダーシップキャンプ(写真5)では、自己認識、コミュニケーション、問題解決能力、論理的思考、自信、社会的責任といったテーマについて、外部インストラクターを招き集中的なプログラムを実施しました。参加した奨学生からは、「意見発信や人前での発表に自信がついた」「学んだスキルを学校や家庭で活用したい」といった前向きな声が上がりました。キャンプ後には、私立校の生徒との交流会(写真6)も開催され、「私立生徒と共通の夢を持っていることに気づいた」という回答が参加者全員から寄せられるなど、意識の変容が見られました。

現地企業との連携も強化されており、英会話学校との協力による小学校での文化交流や食事支援、日本の飛行保険運営組織からの支援を受けたパイロット養成学校への進学支援、日系美容院との職業訓練事業など、多岐にわたる活動が展開されています。

2024年度では、大学卒業生3名の社会での活躍や、パイロット養成学校を修了した2名が将来的に商業パイロットを目指すなど、長期にわたる支援と彼らの努力が実を結び、「貧困層には絶対に届かない」とされていた夢を現実のものとしています。これらの成功は、後に続く奨学生たちのロールモデルとなり、地域社会に希望と誇りをもたらせています。



(写真4) クリスマス会



(写真5) リーダーシップキャンプの様子



(写真6) ラーニングセンターでの私立校生徒との交流

## ■ 参加した人々の声

- ・最も困難な状況の中でも、私を支え、私を育ててくれたDAREDEMO HERO、先生方、仲間たち、そして私を信じてくれた全ての人に、心から感謝しています。(ジェームス・25才)
- ・DAREDEMO HEROのサポートがあったからこそ、私は自分の進みたい道を選ぶことができました。支援がなければ、家族にきっともっと大きな負担をかけていたと思います。今こうして前を向けているのは、皆さまのおかげです。本当にありがとうございます。(キム・16才)
- ・成績優秀者の一人として認められたことは私の努力だけではなく、DAREDEMO HEROが私に与えてくれた仲間や先生、そして家族の支えと励ましの証です。(エラ・19才)
- ・大学という良い環境で学ぶことができ、自分の将来について真剣に考えることができました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。(ネスパー・19才)

### NPO法人 DAREDEMO HERO

住所: 〒662-0051兵庫県西宮市羽衣町7-30 夙川グリーンタウン3F  
URL: <https://daredemohero.com/>



特定非営利活動法人 地球の友と歩む会

# 住民の生活向上のためのライム栽培および販売基盤構築事業

インドネシア 東ヌサトゥンガラ州東スンバ県レワ地区(ムバタプ村、カンバタウンドゥット村)

(2024年4月～2025年3月)

助成額:905,424円

## ■ 活動の概要

東スンバ県はジャカルタから約2,000km離れた地域で、政府の開発から取り残されているため、住民の多くは貧困世帯に属し、農業以外の収入源がありません。農作物の収穫量が少なく、安定した販売先もないため、現金収入を得ることが難しい状況です。この問題を解決するためには、各農家がグループになってまとまり、組織として農作物を卸す仕組みが必要です。

インドネシアではライムは料理に酸味を加えるためによく使われる調味料であるとともに、食材や医薬品、洗剤など多岐にわたる用途があります。しかし、現在、この地方では個々の農家が小規模に栽培し、まとまった供給ができていません。そのため、地元の食堂やレストランでも他地域からライムを仕入れています。このような状況から、農業グループを組織し、ライム栽培を共同で行うことで、安定した供給と収入増加が期待できます。また、ライムの栽培には環境保全の効果もあります。木の葉は有機肥料となり、雨季の氾濫による土地の崩壊を防ぎ、水源の保全にもつながります。

2024年度の活動では、2ヶ村計100世帯の農家を5つの農業グループに組織しました。ライムの苗木合計2,000本を各農家に配布し、有機農法で栽培を行います。化学肥料を使わず、現地の環境に配慮した農法を推奨するため、専門家が研修を実施し、農家に技術指導を行いました。また、個々の農家が単独で販売するのは難しく、安定した取引先を確保するために共同で販売活動を行う必要があるため、共同事業体の設立に向けた準備も進めました。このような活動を通じて、貧困からの脱却を目指していきます。



(写真1) 植え付け前の苗木

(写真2) 参加農家に話をする団体日本人スタッフ  
(右から3人目)

## ■ Report

本活動では、2024年度にはスンバ島の2つの村において、農家100世帯にライムの苗木を合計2,000本配付し、安定した収入源の確保と組織的な農業の基盤づくりを進めています。

苗木は輸送時の重量を軽減するため、土の代わりに湿らせた脱脂綿で根を包んで運びました。到着後は育苗ポットに移し、雨季が始まるまでの約4か月間、カウンターパートの管理のもとで育苗を行いました。この期間中、農家に対して有機肥料の作り方や苗木の植え方、世話の方法についての研修を実施しました。

育苗中に約200本の苗木が枯れてしまいましたが、接ぎ木によって補充し、計画どおり2,000本を配付することができました。

11月後半の雨季の訪れとともに、各世帯には20本ずつの苗木が配られ、農家はこれを畑の周囲に植えました。苗木は順調に育っており、3月末には高さ60～80センチ、枝も5～10本に増えました。ただし、289本が枯れてしまい、その主な原因は水やりの不足や家畜による食害でした。カウンターパートから家畜から苗木を守るために柵を設置するよう参加農家に伝えてもらいました。

現在、1,711本が順調に育っており、全20本が健全に育っている世帯も59戸あります。

また、今後のライム販売を見据えて、農家が共同事業体を設立できるよう、村役場との連携のもと準備を進めています。農業グループでは組織運営や役割分担に関する学習を進めており、数年内の販売開始を目指しています。



(写真3) 植えた苗木についてカウンターパートと話をする団体日本人スタッフ



(写真4,5) 2025年3月末時点の苗木

## ■ 参加した人々の声

- ・私の子どもは将来医者になりたいと言っています。そのためには大学に行かせなくてはなりません。ライムを売って教育費をためたいと思っています。(参加農家①)
- ・研修に出られたので正しい苗木の植え方を身につけることができました。実がつくように世話をしたいです。(参加農家②)
- ・このプロジェクトに協力して参加農家の活動を観察しています。一部の苗木は育ちが遅いようですが、そのほかは順調に育っています。ライムはいずれ村人たちの役に立つので良い作物です。(村の牧師)

特定非営利活動法人 地球の友と歩む会

住所：〒102-0071東京都千代田区富士見2-2-2東京三和ビル503

URL：<https://www.earth-ngo.jp/>



ブルドット

# 貧困層に対する「小規模養豚」導入による副収入の確保と教育

フィリピン 南レイテ州リマサワ町(島) (2024年4月～2025年3月)

助成額:954,744円

## ■ 活動の概要

フィリピンのレイテ島から船で40分ほどの位置にあるリマサワ町は、人口約6,500人の小さな島です。交通の不便さから経済活動へのアクセスが乏しいため、住民1世帯あたりの月収(約12,500円)は、政府の定める極度の貧困ライン(1世帯あたりの平均月収約21,800円)を大幅に下回り、住民は厳しい生活を強いられています。気候変動の影響により台風や熱帯低気圧の被害が頻発しています。2021年末にはスーパー台風ライの直撃により島は壊滅的な被害を受け、復興にはまだ時間がかかる見込みです。

こうした状況下で、州政府や町役場は住民に複数の収入源を持つことを推奨していますが、多くの世帯は副業を始めるための資金や教育機会が不足し、貧困から抜け出せない現状にあります。

2013年の台風ハイエン以来、現地支援を続けるブルドットは、台風ライにより被災したリマサワ町への復興支援を2022年から行い信頼関係を構築し、2023年には養鶏支援を開始しました。その実績により現地から養豚支援の要望を受け、小規模養豚導入プロジェクトを実施しています。

この活動では、①経済的脆弱層10世帯を対象に、豚小屋製作支援や飼育方法の講義等により飼育スキルの普及を行い、②パイロット事業で成功した事例を共有し、販売時期調整や仲買人との交渉支援など、継続的な収入確保に向けたスキルアップを支援することとしています。



(写真1) 団体スタッフによる活動参加者の面接



(写真2) 活動参加者のオリエンテーション



(写真3) 完成した豚小屋



## ■ Report

フィリピン南部のリマサワ島にて、ブルードットが実施した小規模養豚支援事業では、経済的に脆弱な世帯を対象に、持続可能な収入確保と生活の安定を目指した包括的な取り組みが行われました。

2024年5月に日本人スタッフが現地入りし、町役場の協力を得ながら受益者を選定しました。この際、飼育経験や意欲の有無を丁寧に確認し(写真1)、政治的な影響を避けるために複数スタッフによるクロスチェックも実施されました。オリエンテーション(写真2)では、畜産技師による飼育指導や予防接種、収益管理に関する講座が行われ、参加者の理解を深めました。豚小屋(写真3)は受益者自身が製作し、大工経験のある住民が無償で技術支援するなど、地域内での協力も促進されました。

飼育開始後は、週2回のモニタリングやSNSを活用した連絡体制により、技術的な問題への迅速な対応が可能となり、皮膚疾患などの課題も克服されました。第一回目の飼育では、全世帯が成豚の販売に成功し、平均して15,000円の収益を得ました。その収益を再投資し、養豚事業を拡大する動きも見られました。また、販売収益の一部を貯蓄し、相互扶助基金として活用する仕組みも導入され、経済的な自立に向けた意識の高まりが感じられました。

2025年初頭にはアフリカ豚熱が発生するという予期せぬ事態もありましたが、州政府による保険や保証金制度により、経済的損失は回避されました。今後、養豚の再開に向けては土壌消毒や給付確認などの準備を進めるとともに、他事業との連携を強め、持続可能な地域支援の継続が予定されています。



(写真4) 活動参加者に子豚を配布している様子



(写真5) ワクチン接種の様子

## ■ 参加した人々の声

・ブルードットのみなさん(ゆうちょ財団のみなさん)、今回の生計向上支援を本当にありがとうございます。私の願いは娘を大学進学させることです。アフリカ豚熱はとても残念でしたが、私たちは(禁止令が解けたら)今後も養豚を継続して副収入を増やすべきです。そのためにも、今後も私たちはベストを尽くしますし、その機会を作ってくれたあなた方に感謝します。(裨益者グループのリーダー ゴンザロ・マブルスさんの声)

### ブルードット

住所: 〒921-8811 石川県野々市市高橋町3-48 A108  
URL: <https://blue-dot.jp/>

NPO法人 YOU&MEファミリー

# 学校における貧困層生徒職業訓練と、それを持続可能な運営にするための収益化事業

**バングラデシュ** ガジプール県 (2024年4月～2025年3月)

助成額:830,705円

## ■ 活動の概要

YOU&MEファミリーがバングラデシュのガジプール県で2007年に設立し支援しているYOU&MEインターナショナルスクールは、「教育こそが、未来をつくる」をスローガンとして主に貧困層を対象に、子どもの多様性を認め自分らしく生きられる教育を目指した活動を行っています。そして、生徒が楽しみながら個性を伸ばす日本の教育を取り入れた独自の教育として、生徒会やクラブ活動、学校清掃、独自の行事、保護者会、現地病院連携などを展開しています。

バングラデシュでは児童婚が根強い社会的問題となっています。インターナショナルスクールでも児童婚を強制させられた女子生徒がいたことを契機に、YOU&MEファミリーは、子ども達に経済的社会的に自立した人生を歩んでほしいと、職業訓練を兼ねたクラブ活動を立ち上げ運営しています。洋裁の技術を学べる「洋裁クラス」(写真1)とパソコンの技術を学べる「パソコンクラス」(写真2)です。

2024年度は、これら2つのクラブ活動から得られる収益が経費を上回る黒字化を目指しています。



(写真1) 洋裁クラス



(写真2) パソコンクラス



(写真3) スタッフミーティングの様子



## ■ Report

バングラデシュ、ガジプール県のYOU&MEインターナショナルスクールは、貧困層の青少年と地域住民の自立支援を目的に、職業訓練としてパソコンおよび洋裁クラスの運営を継続しています。パソコンクラスは高学年生徒を対象に、週6日開講しており、担当講師が作成した教材を使い、修了試験に合格した生徒には修了証を発行しています。さらに、夜間には大人向けのPCクラスも設け、収益化を図っています。

一方、洋裁クラスは女子生徒を対象に同様に週6日運営され、民族衣装や制服など6種類の商品を生徒と教師が協力して製作・販売しています。特に担当講師のファティマ氏が自ら店舗経営者でもあるため、生徒のロールモデルとなり、将来自営業を目指す生徒たちの意欲を引き出しています。

活動の成果としては、洋裁クラスでは延べ18名の女子生徒が受講し、製品販売においては目標販売金額の96.4%を達成しました。パソコンクラスも同様に延べ18名が受講しましたが、現時点では就職に結びついていないものの、将来的な雇用が期待されています。

しかし、8月の政変による影響で一部の期間はクラスを中止せざるを得ませんでした。特に夜間の大人PCクラスは、生活困難により集客が厳しくなったため、今後の再活性化が課題です。

現地スタッフとの協力体制も強化されており、卒業生2名が営業スタッフとして加わったことで、現場主体の運営が進んでいます。定期的な進捗管理や目標達成時の評価によって、スタッフのモチベーション向上にもつながっています。今後は、収益事業の黒字化を目指して運営のさらなる安定化を図っていく予定です。



(写真4) 生徒の制服販売の採寸の様子



(写真5) 卒業生による募金箱活動  
(右から4人目が玉木代表理事)

## ■ 参加した人々の声

- ・これからはパソコン必須の時代なので、ここで技術を取得し、将来に活かしたいです。(PCクラスの生徒)
- ・将来は、ファティマ先生のように自宅で洋裁店を開業し自立したいです。(洋裁クラスの生徒)
- ・この収益化事業の考えに共感します。生徒への職業訓練は、この地域の子どもたちに必要なもので、それを安心して運営できるようビジネスをがんばりたいです。(教師スタッフ)
- ・学校でビジネスをして訓練クラスを支えるのは、とてもいいです。自分たち卒業生も、学校行事や校舎修理など助ける目的で、募金活動を始めました。(卒業生)

NPO法人 YOU&MEファミリー

住所: 〒340-0043 埼玉県草加市草加1-3-4

URL: [www.youandmebangladesh.org](http://www.youandmebangladesh.org)



特定非営利活動法人 Little Bees International

## 循環型社会形成を目指したリサイクルバックの製作による貧困層の女性と子どもたちのエンパワメント事業(3年目)

**ケニア** ナイロビ市 (2024年4月～2025年3月)  
助成額:1,000,000円

### ■ 活動の概要

ケニアの首都ナイロビでは、中国の投資を中心にした大規模なインフラ整備や開発が進行中です。しかし、一方では貧富の差が大きく広がり、失業率も高いため、多くの人々が極度の貧困状態で生活を強いられています。

コロゴッチョ・スラムはナイロビの郊外に位置し、約20万人の人々が1日わずか1.25ドル(約190円)以下で生計を立てています。この地域の名前はスワヒリ語で「useless(役に立たない)」を意味し、その名が示す通り、ここに住む人々は差別的な扱いを受けてきました。

Little Bees International(LBI)は、コロゴッチョ・スラムに住む女性と子供たちに、甘えではなく”自律”と”自立”に基づいた生きる力を育てることをミッションとして設立されました。そして、HIV陽性やシングルマザーの女性たちの収入向上と自立を目指し、女性グループ「Korogocho Smart Women Group」(写真1)を立ち上げました。現在、約40名の女性がリサイクルバックの製作・販売をしています。



(写真1)コロゴッチョの女性グループ



(写真2)作業場にて



(写真3)女性グループの活動を手伝う現地留学生の方たち

## ■ Report

LBIは、3年間にわたり地域の女性たちのエンパワーメントと循環型社会の構築を目指して活動してきました。特に3年目となる2024年度は、これまでの基盤を活かし、より持続可能で発展的な活動として地域に根づかせるための取り組みを行いました。

主な活動としては、貧困層、シングルマザー、HIV陽性の女性たちが安心して参加できる作業場の整備、ミシンなどの設備の拡充、リサイクル素材を活用したバッグの製作と販売が挙げられます。特に、日本のNGO「アフリカ児童教育基金の会(ACEF)」と連携し、裁縫研修を実施することで、バッグの品質とデザインが向上し、市場での販売促進にもつながっています。

また、スクールバッグを通じて、物価高の影響で就学が困難な子どもたちへの教育支援にも寄与しています。バッグには環境保全を訴えるメッセージが添えられ、地域の環境意識の向上にも貢献しています。地域の市場に設置された展示販売所では住民との交流も生まれ、女性たちのモチベーションも高まりました。

公衆衛生活動にも力を入れ、感染症対策として現地保健省や専門家の協力を得ながら、女性たちが安心して活動できる環境を整えています。さらに、グループ活動のマネジメントや帳簿管理など、次世代リーダーの育成にも注力し、持続可能な自立支援の基盤を築いています。

一方で、活動の広がりに対して作業場のスペースが不足し、参加を見送らざるを得ないケースも見られました。今後は作業場の拡張や活動のスケールアップを視野に、持続的な運営体制の強化を図ってまいります。



(写真4) 新しいメンバーへのTシャツの贈呈



(写真5) マーケットでの展示

## ■ 参加した人々の声

- ・貧しさから学校を途中でやめざるを得なかった自分でも、こうしていっしょにグループの一員として活動できるんだ、ということは大きな自身につながっています。子どもたちの母としても積極的になりました。(女性グループリーダー：エヴァリンさん)
- ・アフリカ・ケニアの女性としてコミュニティの女性たちのために何かをしたい気持ちはもっていました。今回、こうして講師としての機会をいただけて、自分の願いが実現できたことはうれしいことです。(裁縫講師：ルースさん)

特定非営利活動法人 Little Bees International  
住所: 〒116-0014 東京都荒川区東日暮里6-40-21  
URL: <https://www.littlebeesinternational.org/>



特定非営利活動法人 LOOB JAPAN

# 資源循環社会の形成に向けたごみ処理場コミュニティのユースリーダー能力強化(第3期)

**フィリピン** 西ビサヤ地方イロイロ州 イロイロ市 (2024年4月～2025年3月)  
助成額: 1,000,000円

## ■ 活動の概要

フィリピンの人口50万人のイロイロ市では、市民へのごみの分別・リサイクルの教育が遅れており、大量の廃棄物・プラスチック等の資源ごみが路上や海岸に投機されています。資源ごみの回収は、ごみ処理場周辺に住むウェストリサイクラー(※1)が担っています。

LOOB JAPANは、環境意識を市民へ広めていくことを目的として、高校生・大学生を中心に、リーダーシップトレーニングや環境教育を実施し、社会を変えていけるユースリーダーを育成するとともに、ウェストリサイクラーの就労環境の改善も行っています。

※1: 市や業者に雇用されてはならず、未分別ごみを手で分別し、有価物を地域のジャンクショップに売却することで収入を得ている。



(写真1) ユースリーダートレーニング



(写真2) 奨学金を受ける5名



(写真3) 廃棄物管理の流れを座学で学びグループ発表



## ■ Report

LOOB JAPANは、フィリピン・イロイロ市において、地域の環境課題に取り組む若者や廃棄物処理場で働く人々を対象に、環境教育および就労支援活動を実施しました。まず、ごみ処理場周辺のコミュニティに住む高校生・大学生20人に対して、SDGsや廃棄物管理に関するトレーニングを行い(写真1)、環境啓発活動ができるユースリーダーとして育成しています。

2024年度の活動では、育成されたユースリーダーは、市内5つの公立高校で環境啓発クラスを開催し、計100人の生徒が参加しました。生徒たちは廃棄物管理の基礎知識を学び、衛生埋立場への社会見学(写真4)を通じて現場の実情に触れました。その後はオンラインで学びを共有し、理解を深めました。

また、廃棄物処理場のある地域の役場内にインフォメーションセンターを開設し、ウェストリサイクラー5人をゼロウェストオフィサー(※2)として養成しました(写真5)。彼らは見学ツアーのガイドとして活動し、2024年7月から2025年3月にかけて、合計527人の来訪者に対応しました。さらに、安全装具を30人に配布し、就労環境の改善にも取り組みました。

奨学生5人への奨学金提供(写真2)や、能力開発トレーニングの実施も行い、若者の成長を支援しました。活動の中で、学校側との連携がスムーズに進み、特に衛生埋立場への見学(写真4)は高く評価されました。一方で、ユースリーダーの継続的な活動支援に課題があり、今後はメンター制度や定期ミーティングを通じてサポート体制を強化する予定です。

※2：ごみの削減・再利用・リサイクルを推進し、最終的に廃棄物をゼロにすることを目指す専門職。



(写真4) 衛生埋立場への社会見学



(写真5) ゼロウェストオフィサーとして活躍するメンバーと小林代表理事(中央)

## ■ 参加した人々の声

・今年は奨学金を受け取りながらこの活動に参加でき、感謝しています。自分が通っている学校とは違う学校で、人の前に立って話すのは緊張しましたが、終わった後は自信が付きました。自分にもできると気づけたのが一番の収穫です。(高校生ユースリーダー(男性、18歳))

・教室だけでは伝えきれない現実を、子どもたちはフィールドトリップを通して肌で感じていました。LOOBの活動は、地域に根ざした学びを育てる大切な機会になっています。(学校の先生の声(女性45歳))

・自分たちの仕事が“ごみ拾い”ではなく、資源を守る大切な役割なんだと知ってもらえて嬉しいです。自分の知識を使って、訪問者の方に学んでもらえて嬉しいです。(ウェストリサイクラー(女性34歳))

特定非営利活動法人 LOOB JAPAN

住所：〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1丁目24-4 井川ビル2F

URL：<https://www.loobinc.com/>





## 2. 多文化共生推進活動助成

2024年度の助成団体2団体について、活動概要、助成期間中の活動に関するReport及び参加した人々の声をまとめました。

特定非営利活動法人 国際交流の会とよなか (TIFA)

## 地域に住む外国人及び外国にルーツを持つ人々への支援活動

活動地域：大阪府豊中市・池田市・吹田市 (2024年8月～2025年3月)

助成額：500,000円

### ■ 活動の概要

地域に住む外国人やその家族、また外国にルーツを持つ方々への支援活動として、国際交流の会とよなか (TIFA)は日本語指導や生活相談など、多岐にわたるサポートを行っています。地域に新しく住み始めた外国人からは、日本語を学びたい、在留資格の相談をしたい、子どもの学校を探したい、仕事を見つけないなど、さまざまな要望が寄せられています。

こうしたニーズに応えるため、日本語教室を週2回、火曜日と金曜日の夜間に実施し(写真1,2)、相談については随時対応しています。特にコロナ禍以降、学習者の利便性を考え、オンラインでの日本語クラスも導入しました。このオンライン教室は、遠方の方や仕事で忙しい方にも好評で、学習者の数も増加しています。

TIFAは、地域の多国籍レストランを拠点に、多文化交流を促進しながら支援を行っています。このレストランは毎日開いており、いつでも気軽に相談ができる場所として機能しています。また、月に一度、留学生や就労者など在住外国人とその家族が自由に相談できる場も設けています(写真3)。

相談内容は日本語指導だけにとどまらず、在留資格の取得や更新に関する専門的なアドバイスも提供しています。必要に応じて、行政書士などの専門家が対応し、出入国手続きやビザの申請といった複雑な問題にも丁寧に対応しています(写真4)。

活動を継続するためには、資料作成費やオンラインツールの利用料、交通費、食費などの運営費が必要となります。現在はボランティア中心で活動していますが、こうした費用の支援が不可欠となってきています。地域の皆様や関心を持ってくださる方々からのご支援が、外国人の方々が安心して暮らせる環境づくりにつながります。

多様性が共生する地域社会の実現に向けて、私たちは引き続き取り組んでまいります。外国人の方々が直面する困難を一緒に乗り越え、地域全体が笑顔でつながる社会を目指しています。



(写真1,2) 金曜日の日本語クラス。ネパールから来日した中高生や、ボツワナから来日した外国語指導助手の先生の勉強風景

## ■ Report

TIFAは、在住外国人の日本語学習と地域との交流を目的とした活動を行っています。2024年9月から2025年3月にかけては、日本語クラスと交流イベントを定期的に行いました。

火曜日の夜には、オンライン日本語クラスを25回実施しました。リレートークで会話力を高めた後、学習者のレベルに応じたグループ学習を行いました。参加者は主にベトナム出身の社会人のほか、フィリピン、スリランカ、オランダなど多国籍の方々でした。

金曜日は対面形式の「日本語交流サロン」を開催し、学習者のレベルや目的に応じた個別指導を行いました。初級者には文字や生活日本語、中・上級者には日本語能力試験対策や進学支援など、幅広いサポートが行われました。

さらに、月に1回開催された「HAND IN HAND」交流会(写真3)では、地域に住む外国人やその家族が気軽に悩みを話せる場を提供しています。2024年9月から2025年3月までに全7回実施され、インド、ベトナム、ネパール、ルーマニアなどの外国人シェフによるランチを楽しみながら交流しました。行政書士によるビザや在留資格に関する相談も実施されています(写真4)。

これらの活動を通じて、日本語能力の向上や資格試験合格、職場での適応など、多くの成果が見られました。今後も外国人が安心して暮らせる社会の実現に向けた取り組みが続けられます。



(写真3) HAND IN HANDのよう



(写真4) 行政書士さんを交えての相談会

## ■ 参加した人々の声

- ・ 作文を書くのは本当に楽しいです。会話を練習するとき、言いたいことがたくさんあるのですが、日本語が上手ではないので言えません。しかし、書くと、言いたいことをすべて表現することができます。毎月の作文課題に感謝しています。
- ・ 家では母国語で話しているので、日本語での会話ができて良かった。仕事で使う言葉・表現をたくさん勉強できてうれしい。
- ・ HAND IN HANDでは、日本人と他の外国の方々と交流し、ランチと食べながら楽しく会話することができて良かったです。いろんな国からの留学生や、また働いている人たちの話や経験などを聞くのがいつも楽しみでした。また、滞在延長の手続きなどの相談に乗ってもらい、いろいろと教えてもらえたので、安心しました。
- ・ HAND IN HANDのような交流イベントがあって本当によかったです。さまざまな国の料理を楽しめ、気軽に会話できるこの場は意義深い活動だと思います。これからも続けてほしいです。

**特定非営利活動法人 国際交流の会とよなか(TIFA)**

住所: 〒560-0021大阪府豊中市本町3-3-2-101

URL: <https://tifa-toyonaka.org/>



一般社団法人 モザンビークのいのちをつなぐ会

## 平和と調和ある未来を創造する青少年を育む 多文化共生イベントの実施

活動地域：大阪府門真市、京都府京都市上京区、東京都渋谷区、神奈川県相模市及び横浜市、山梨県甲府市、沖縄県那覇市（2024年8月～2025年1月）  
助成額：500,000円



(写真1) 門真市立門真みらい小学校でのイベントのもよう(中央にナジャ氏)

### ■ 活動の概要

モザンビークのいのちをつなぐ会は、支援の光の当たらないモザンビーク北部で教育施設・寺子屋や紛争避難施設・平和の家の運営など、いのちをつなぐ活動を行っています。

多文化共生推進に関する今回の活動は、日本全国の各地で小学校や市民センター、コミュニティ施設などを会場に、平和教育や多文化共生理解、キャリア教育に関する講義・講演・ワークショップを実施するものです。

これらのイベントは、モザンビークの国民的ミュージシャンで社会活動家のナジャ氏と一緒に行われ、クオリティの高い音楽を交えることで、固いNGOイベントのイメージから間口を広げて、外国人を含め、広く参加者が来場し、感性と知性に刺激を与えることができました。

実施地域は大阪・京都、東京・山梨・神奈川、沖縄の全国2323会場にて、多文化共生や平和教育、国際理解をテーマとした講義公演を実施し、延べ2,592名が参加しました。

特に、神奈川で実施された「THE ONE」では、世界の孤児院の子どもたちが演劇を通じて自己表現し、参加者との交流を深めました。



(写真2) THE ONE 世界6カ国のスラムと孤児院の子どもたちのワークショップin神奈川



(写真3) 門真市立四宮小学校でのイベントのもよう



(写真4) 立命館大学国際平和ミュージアムでの平和創造ワークショップのもよう

## ■ Report

モザンビークのいのちをつなぐ会は、全国7都道府県の学校や市民センター、コミュニティスペースなどの23会場で講義公演を実施しました。講義公演の内容はスラムの暮らしから生まれた音楽のライブ演奏、国際情勢、紛争、共創に関するもので、一人ひとりの相互扶助の力について伝える活動を展開しました。

中でも、世界6カ国の子どもたちと日本の青少年が共に舞台をつくり上げる「THE ONE」プロジェクトは特長的な取り組みです。神奈川県で行われた15日間のワークショップでは、モザンビークから来日した子どもたちと日本の若者が言葉や文化の壁を越えて協力し、聴覚障害を持つ少女マギーさんが、最終的に歌を披露するまでに成長しました。この経験は、参加者全員にとって大きな感動と自信につながりました。

また、大阪や沖縄での講義では、地域に根差した貧困や教育の課題と、海外のスラムとを重ね合わせ、日本国内の社会課題にも深く目を向けるきっかけとなりました。講義公演は児童・生徒だけでなく大人にも好評で、次年度の開催を希望する声も多く寄せられています。

今後は、大人の意識改革にもつながる講義内容をより充実させ、豊かな精神を育む社会の実現に貢献してまいります。活動を通して、国籍や文化の違いを越えて支え合う力の大切さを伝え、平和で調和のとれた未来を目指していきます。

## ■ 参加した人々の声

(小学生)

- ・みんなで合奏するのはドキドキしたけど、それぞれの楽器が合わさって迫力がある音楽ができることやみんなで協力すると大きな力が生まれることがわかった。
- ・世界の国では同じ学校に沢山の民族や国の人が通っていることを知った。いろいろな人たちと知り合って、一緒に勉強するのは、楽しいと思った。
- ・モザンビークの戦争の話に悲しくなった。私と同じ年の子どもたちの家族が傷ついていくので、戦争はなくてほしいと思った。

(THE ONE来場者)

- ・とにかく子どもたちが輝いていて素晴らしかった。それぞれの国の特長を活かした演出に感動した。
- ・初めての外国で、初めての日本で、それなのにのびのびとパフォーマンスしている子どもたちの笑顔に希望をもらった。

(市民センター来場者)

- ・アフリカは遠い国だと思っていたが経済的なつながり、資源の問題など、日本との関係性もわかり大変学びになった。次回もお話を伺いたい。
- ・ナジャさんの歌の説明で、現地の文化や暮らしをより理解できた。音楽のちからの凄さを知る良いきっかけになった。音楽で、国際問題を身近に感じる良い仕組みだと思った。

一般社団法人 モザンビークのいのちをつなぐ会

住所: 〒800-0233 北九州市小倉南区朽網西三丁目12-6

URL: <https://tsunagukai.com/>

一般財団法人ゆうちょ財団 国際ボランティア支援事業部  
〒162-08 東京都新宿区市谷本村町2-1クイーポビル9階  
TEL.03-6631-1006 / FAX.03-6631-1008  
電子メール： [vlcenter@yu-cho-f.jp](mailto:vlcenter@yu-cho-f.jp)

当事業部のキャラクター  
「ボラン」と「ティア」ちゃん

